関東・甲越地区におけるスモン患者の検診　―第32報―

中嶋　秀人（日本大学医学部内科学系神経内科学分野）
小川　克彦（日本大学医学部内科学系神経内科学分野）
白岩　伸子（筑波技術大学保健科学部）
森田　光哉（自治医科大学附属病院医学部内科学講座神経内科）
長嶋　和明（群馬大学医学部附属病院脳神経内科）
尾方　克久（国立病院機構東埼玉病院臨床研究部）
里宇　明元（慶應義塾大学医学部リハビリテーション医学教室）
大竹　敏之（東京都医学総合研究所運動・感覚システム研究分野）
中村　　健（横浜市立大学附属病院リハビリテーション科学）
長谷川一子（国立病院機構相模原病院神経内科）
小池　亮子（国立病院機構西新潟中央病院臨床研究部）
瀧山　嘉久（山梨大学大学院神経内科）
橋本　修二（藤田医科大学衛生学講座）

研究要旨

令和元年度の関東・甲越地区の現況を明らかにした。受診者数は82名（平均年齢80.7歳、男性29名、女性53名）で、昨年から6名減少し、昨年同様75歳以上が75%を占めた。受療状況は在宅で外来受診が8割弱を占めたが、歩行不能が増加し、寝たきりや座位生活のために長期入院の割合が著増した。骨折、脊椎疾患、四肢関節疾患の整形外科受療も高く、高齢化を背景にしたADL低下が示された。主たる介護者は、配偶者、子供や兄弟、ヘルパーなど家族以外が、それぞれ3分の1ずつであったが、患者の34.1%は一人暮らしであった。身障手帳保有率は約9割、介護保険申請も5割以上あり、ここ10年間の介護保険によるサービスの利用頻度は大きく増加しており、高齢化や独居における介護体制の維持も重要である。

A．研究目的

昭和63年度から関東・甲越地区にて行っているスモン患者の検診を継続し、令和元年度の関東・甲越地区におけるスモン患者の現況を明らかにする。

B．研究方法

関東・甲越地区のスモン患者のうち、1都3県の在住者には主にチームリーダーが検診案内を郵送し、それ他5県は主に検診担当者が連絡した。検診後に送付された「スモン現状調査個人票」とスモン医療システム委員会からの集計資料をもとに、同意の得られたスモン検診患者の現況を分析した。

（倫理面への配慮）

本研究は、受診者本人自身からそのデータの研究資料として用いることについて、受診時に文書で同意を得て、同意がない場合にはデータから削除した。なお、データは、匿名化して個人を同定できないようにして集積し、データ解析を実施した。

C．研究結果

1．受診者数

同意の得られた受診者数は82名（平均年齢80.7歳、

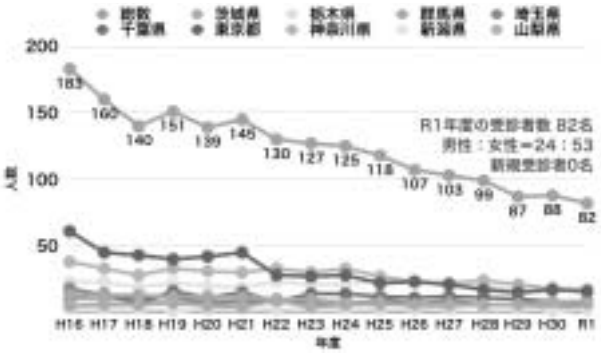

図 1　受診者総数の推移

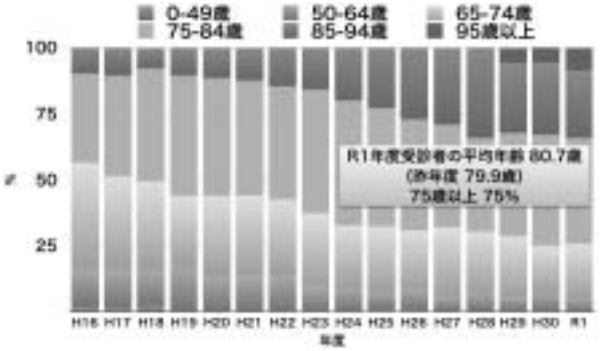

図 2　受診者数の年齢層割合の推移

男性 29 名、女性 53 名)。受診者総数の継時的推移を**図 1** に示す。受診者総数は 16 年度の 183 名から年度ごとに減少し、昨年に比べて 6 名減少した。新規受診者はなかった。地域別では、茨城県 7 名、栃木県 2 名、群馬県 4 名、埼玉県 6 名、千葉県 8 名、東京都 16 名、神奈川県 15 名、新潟県 18 名、山梨県 6 名であった。

２．受診者の年齢

平均年齢は 80.7 歳と昨年の 79.9 歳より 0.8 歳高かった。年齢構成は 50～64 歳 4.9%、65～74 歳 20.7%、75～84 歳 40.2%、85 歳以上が 34.1%であり、年々高齢層が増加し、令和元年度は全員 50 歳以上で、昨年と同様に 75 歳以上が 75%を占めた。平成 16 年からの各年齢層の割合の推移を**図 2** に示す。

３．療養状況および介護

療養状況および介護について**図 3** に示す。在宅 78.1%、時々入院が 7.3%、長期入院（入所）は 14.6%と高齢化に伴い長期入院の割合が昨年の倍と大きく増加していた。受診者の 65.1%が毎日または時々介護を必要とし、介護者不在も 2.5%でみられ、問題点として

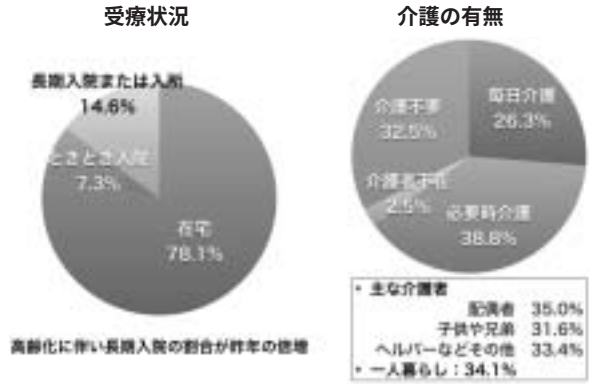

図 3　療養状況・介護の有無

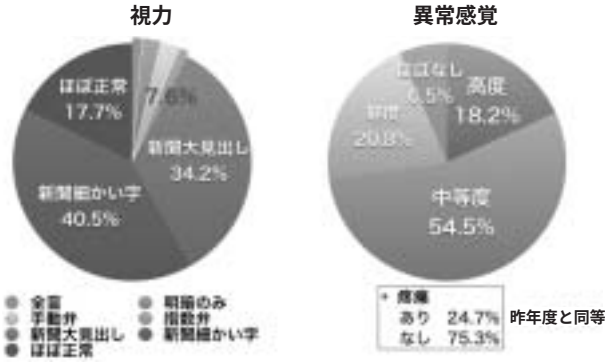

図 4　主な症状：視力障害と異常感覚

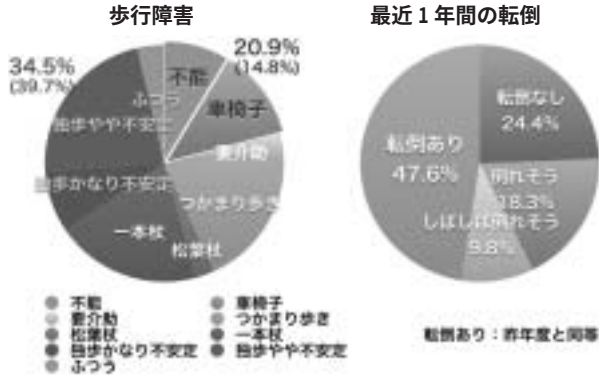

図 5　主な症状：歩行障害と最近 1 年間の転倒

あげられた。主な介護者は配偶者 35%、子供や兄弟 31.6%、ヘルパーなどその他 33.4%であった。また受診者の 34.1%は一人暮らしであった。

４．主な症状

視力障害と異常感覚の内訳を**図 4** に示す。視力がほとんど正常は 17.7%と低く、指数弁以下が 7.6%でみられた。異常感覚は中等度以上が 72.7%と昨年と同等で、痛みは 24.7%に伴っていた。

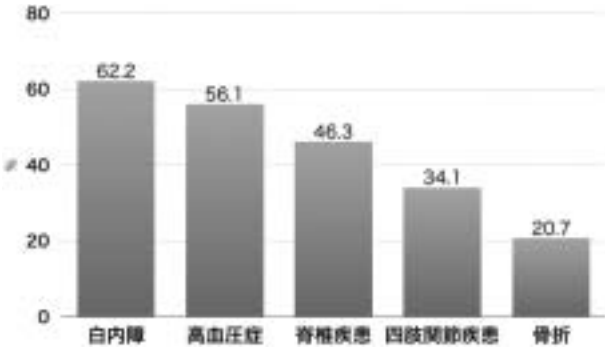

図 6　併発症

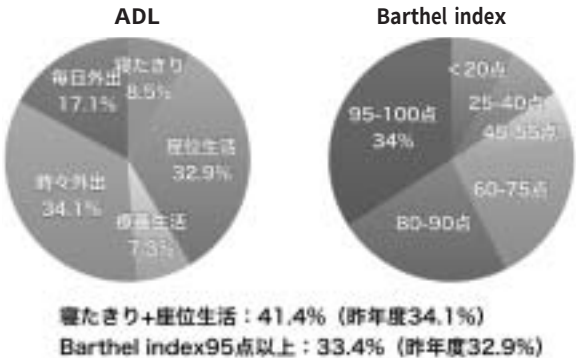

図 7　ADL および Barthel index

歩行障害の内訳を**図 5** に示す。歩行は介助不要の独歩が 34.5%と昨年よりも低下し、歩行不能は 20.9%と 6.1%増加し、高齢化を背景に症状の増悪を示した。最近 1 年間の転倒の既往は 42.6%と昨年同等に高かく、8 割弱の患者で転倒歴があった。

5．併発症

併発症について**図 6** に示す。白内障 62.2%と多く、高血圧症も 56.1%と多かった。また、整形外科的疾患である骨折 20.7%、脊椎疾患 46.3%、四肢関節疾患が 34.1%と多かった。

6．日常生活動作（ADL）および Barthel index

ADL および Barthel index の結果を**図 7** に示す。寝たきり 13.4%、座位生活 28.0%と高齢化に伴い昨年よりも高率であり、時々外出以上は 51.2%と低下していた。Barthel index 95 点以上と機能良好例は 34.0%と横ばいであった。

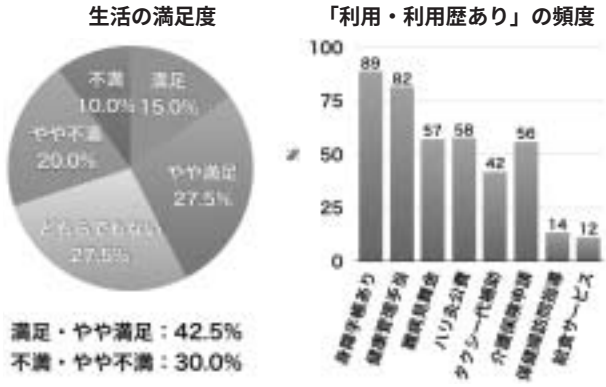

図 8　生活満足度および保健・医療・福祉・サービスの利用

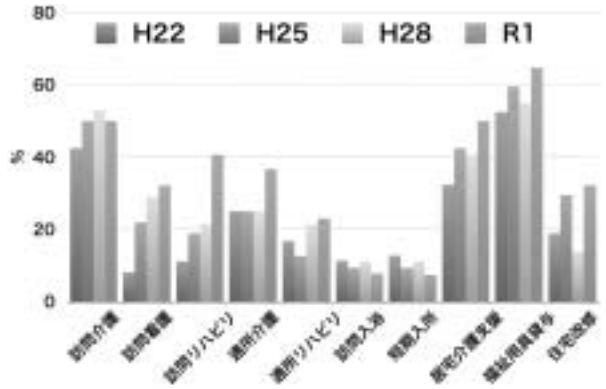

図 9　介護支援サービスの内訳

7．生活の満足度および保健・医療・福祉・サービスの利用

生活の満足度および保健・医療・福祉・サービスの利用の結果を**図 8** に示す。生活の満足度において、不満・どちらかというと不満の合計の頻度は 30%を示し、3 割の受診者が生活に不満を有していた。一方、保健・医療・福祉・サービスの利用では、身障手帳の保有率は 89%と高く、健康管理手当・難病見舞金・ハリ灸公費負担も 82～42%とそれなりの頻度で受けており、介護保険申請も 56%と半数を超えていた。**図 9** に示すように、介護保険によるサービス利用状況では、訪問看護と訪問リハビリテーションの増加幅が大きく、通所介護と通所リハビリテーションの増加が続いている。居宅介護支援や複視腰部貸与も増えており、高齢化とともに在宅での介護支援サービスの利用が増加していることがうかがえた。

D．考察

昭和 63 年度からの検診を継続し、令和元年度の関東・甲越地区における患者の現況を明らかにした。受診総数は 82 名（平均年齢 80.7 歳、男性 29 名、女性 53 名）で、受診者の高齢化を反映して平成 16 年度以後徐々に減少し、昨年と比較して 6 名減少した。75 歳以上が 75%を占め、患者の高齢化が一段と進んでいた。現況として、在宅 78.0%と外来受診をしている患者が多かったが、長期入院（入所）は 14.6%と高齢化に伴い長期入院の割合が昨年の倍と大きく増加していた。受診者の 65.1%が毎日または時々介護を必要とし、介護者不在も 2.5%でみられ、問題点と考えられた。症状では視力障害、異常感覚、歩行障害が多いが、歩行障害に関して、介助不要の独歩が 34.5%と昨年よりも低下し、歩行不能は 20.9%と 6.1%増加し、高齢化を背景に症状の増悪を示した。また、骨折（20.7%）、脊椎疾患（46.3%）、四肢関節疾患（34.1%）など整形外科疾患の併発が多く、最近 1 年間の転倒の既往が 42.6%と昨年と同様で高いこともあり、転倒予防も今後の課題と考えた。

生活の満足度では受診者の約 3 割で不満をみとめた。身障手帳保有率は約 9 割と高く、また介護保険の申請も 5 割以上であった。介護保険によるサービスの利用状況では、ここ 10 年間全般的に利用頻度が大きく増加していたが、訪問看護と訪問リハビリテーションの増加幅が大きく、高齢化とともに在宅での介護支援サービスの利用が増加していることがうかがえた。当班で実施してきた支援内容の周知についての広報活動がそのサービス受療の向上に寄与してきたと考えられるが、患者の 34.1%は一人暮らしであり、高齢化や独居における介護体制の維持も引き続き必要である。

E．結論

令和元年度の関東・甲越地区の現況を明らかにした。受診数は昨年から 6 名減少し、75 歳以上が 75%を占めた。受療状況は在宅で外来受診が 8 割弱を占めたが、歩行不能が増加し、寝たきりや座位生活のために長期入院の割合が著増した。骨折、脊椎疾患、四肢関節疾患の整形外科受療も高く、高齢化を背景にした ADL 低下が示された。主たる介護者は、配偶者、子供や兄弟、ヘルパーなど家族以外が、それぞれ 3 分の 1 ずつであったが、患者の 34.1%は一人暮らしであり、高齢化や独居における介護体制の維持も今後の課題と考えられた。

G．研究発表

1．論文発表

なし

2．学会発表

なし

H．知的財産権の出願・登録状況

なし

I．文献

1）亀井 聡，小川克彦，大越教夫，森田光哉，長嶋和明，尾形克久，山中義崇，里宇明元，大竹敏之，中村 健，長谷川一子，小池亮子，滝山嘉久，橋本修二：関東・甲越地区におけるスモン患者の検診―第 30 報―．厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班．平成 30 年度総括・分担研究報告書，pp. 60-64，2019.

2）亀井 聡，小川克彦，里宇明元，大竹敏之：東京都におけるスモン患者の検診．厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班．平成 30 年度総括・分担研究報告書，pp. 85-87，2019.